

タイトル「タイムラインを遡る」

元作品:なし

著者:柿ノ木コジロー

あらすじ: 年老いた啓介はベッドの上で目が覚める。枕元にどこか覚えのあるような少女。彼が目を閉じると、次々と遡っていくのは過去の記憶……それはどれも啓介が大好きな風呂につながっていた。

特記事項:特になし

文字数:4997

以下本文

---

目が覚める。啓介の枕元近く、ベッドの縁に浅く腰かけていた少女が顔を上げた。「気が付いた？」目つきが誰かに似ている。愛嬌のある優しい感じではない、しかし、力を込めた目元にうっすらと心配の色が滲んでいる。

頭の中に乾いた風が吹き込んでいる感がある、が、体は重い。啓介は腕を上げようと少しもがいて、あきらめた。白い布団の中に縫い留められているようだ。見ると腕から細いチューブが天井に伸びていて、透明な水の入ったバッグがふたつほど見えた。

「救急車で運ばれてずっと朦朧としてて、覚えてない？」

少女のことばに反対側の窓を見る。外は明るく、大きな木が涼し気に梢を揺らしている。日の光が当たるところがきらめいている。何の木だろう、多分、ずっと前にも見た。

梢が、葉が吹かれている風がそのまま、自分の頭の中を吹き抜けているようだ。

啓介は枕元に目を戻す。

この子は誰なんだろう、多分、ずっと前から知っている。少女はすでに、手元の小さな機械に目を戻している。前髪が表情を隠し、すでにそれは誰でもない誰かになっている。

どちらも覚えていないだけだ。

彼はまた目をつぶった。

長い形の浴槽に入っていた。頭を動かすと視界が回る。のけぞるように頭を湯船の縁に預ける。

飲みすぎよ、と妻の理恵は泣いた。飲みすぎだよ、と娘のチカは怒鳴った。娘の小さな子ども——名前が分からない——は、あどけない目で晩酌をしている啓介を眺めているだけだ。白目が透き通ったように美しい。何故か娘はその子とここに住んでいる。

——オマエのダンナはどうしたんだ、立派なダンナは。ダンナの働きだけで食っていけるって言ってたんじゃないのか？ それで出て行ったんだろ？ なんでオマエらは、いつまでもうちに居るんだ？ 新しい家はどうした？ 売った？ ならその金はどこに行ったんだ？

口に出したのかも知れない、娘は急に黙って下を向いた。しばらくして、かすかな雨音。いや、涙も音を立てるのだと啓介は初めて知った。

「辛気臭えな」ちっ、と舌打ちをして立ち上がると視界が揺れた。

どっから間違っちゃったんだろ、と背後でかすかに呟く声があった。いや、間違いなんてなかった、そんなもの最初から……頭の中で繰り返して風呂場に行く。

流れはもう決まっている。時の流れは変えられない、いくら未来に進もうと、過去を振り返ろうと、変えられるものではないのだ。

定年直後に近所の連れと始めた事業は借金が膨らみ、連れはひとり、夜逃げした。その残された家族を養おうと妻に内緒でシルバー雇用の他に副業までして、給料の半分を渡した。

すっかり面やつれした連れの妻が、いつも押し頂くように微々たる額を受け取るたびに鼻の奥がつんと痛んだ。

一件が理恵の耳に入った時には揉めにもめた。覆水盆に返らずだ、となじられた。そんなことより自分と家族を守るのを優先してよ、と。

覆水は盆に返らず、こぼした酒も元に戻らない。しかしそれを這いつくばって吸い尽くすのが、俺のような呑兵衛の実態なんだよ、と、啓介は毎日毎晩浴びるように酒に逃げた。

今夜も湯船に浸かり、すでに意識は温かな靄の中に包まれている。大きな木が梢を揺らしている。窓から見えるのは隣家の塀だけのはずだ、この木は何だ？ 空が青い、今は夜なのに。しかし、気持ちいいな。

——ジリジリジリジリジリジリジリジリ

突如耳に飛び込んだのは非常ベルの音、啓介ははっと目覚めた。鼻のすぐ下まで生ぬるい湯が迫っている。息を吸った瞬間に少し吸い込んで、鼻孔奥がつん、とした。

しばし呆然と、湯の中にいた。あたりは静まり返り、しまりの悪い蛇口から、ぽつりと水滴が落ちる音しか耳に届かない。あんなベルは、家にあるわけではないのに……すっかり酔いは醒めていた。

気づいたら白く濁ったうねりの中にいた。かなり熱めで、湯気がものすごく景色も霞んでいる。どうやらゴツゴツした岩に囲まれた温泉のようだ。体はすっかり温まっているのに、頭はひやりと夜気を感じている。

それにしても、と近くの岩陰から声があった。理恵の声だ。岩が硬いのか、軽く余韻が響く。

こんな素敵な温泉、よく知ってたわね、お父さん。

当たり前だろ、と啓介は笑う。生まれ故郷だし、経営者が同級の林くんだしね。この温泉地でもいっとう湯が良いんだ。それにしても、と後は心の中でつぶやく。男女混浴じゃあ、なかったはずだが。

「オマエどうしてここに？」

やだあ、お父さん、ころころとよく笑う、妻の笑い方はいつもこうだった。一緒に入ろうって誘ったのお父さんじゃない。昨夜は別々に入ってたら急に非常ベルが鳴って、慌てて飛び出したでしょ？ 怖いからひとりじゃイヤだって言ったら、じゃ明日は夜中に一緒に入ろうか、って。

妻の話題は次々と変わっていく。でもさ、気が利いてるよね、お父さんの会社。勤続25年でまとまったお休みが取れるなんて、お父さんとにかく仕事一筋だったから、え？ 違うよ馬鹿にしてるんじゃないかって、うれしいのよ。よくお休みに旅行いこうって言ったな、ってさ……チカは受験勉強忙しいなんて言って、お友だちとクリスマスパーティーらしいのよ、もう家族旅行なんて歳じゃないんだよね。次はいつこんなお休みが？ その時も一緒に旅行いけるといいね。ところで定年になったらどうするの？ お酒も多くなってきたからいっぺんちゃんと健康診断してね、そう言えばお父さん、実家の場所、アパートになっちゃったんだよね？ お義父さんお義母さん達のお墓は残ってるの？ お参りくらいはしなくちゃね、そうそう宿のご主人、林さん、お父さんのこと今でも「けいちゃん」だって、可愛いよね。で、お父さんは「林くん」って何。可笑的い。けいちゃん、けいちゃん……

「うるさいなあ」いつまでもこだまがけいちゃんと呼び続けて、コロコロと笑う。そんなに面白いのだろうか。啓介は聞こえないふりをして岩の滑らかな場所に背を預け、ほおっと大きく息を吐いた。

「俺さ」こんな中だから素直に出ることばもある。ずっと抱いていた思いも。

「定年になったら、石上さんと事務所やろうかと思うんだ」

「石上さん、飲み仲間の？」

「そう」

「あの人かあ」声がまた笑っている。「いい人だよ、優しそう、でも痩せすぎで奥さん太っててなんか漫才コンビみたい、で、何の事務所？」

「屋外設備とか……せっかく専門だったんだし、石上さんは経理できるし」

「いいんじゃない？」なぜか妻はずっと笑っている。

星空も笑っている。上空は風があるのだろう、またたいて、笑っているようだ。

いつの間にか、空が白みはじめ、山の端に大きな月が沈もうとしていた。あんなに大きな月を見たことがない、啓介はじっと、目を離すことなく空の様子を見守っていた。

どんどんと空は明るくなり、東の空から金色の光が射した。細く切れ切れにたなびく雲の輪郭が明るく燃え上がる。透き通った空は青から紫、紫からピンクへと切れ目なく色を変えてすぐに一番明るい太陽の片りんが彼の網膜を焼いた。

じゅういち、じゅうに、たどたどしい声がタイルに響く。

まだだよ、20まで、と啓介は湯船の外に座る自分の声を聞く。

「しっかり肩まで」

小さな四角い風呂桶はあんがい深く、小さなチカはふうふうと息を荒くつきながら、続きを数えている。

「風邪ひくから、ちゃんと」

もういいよお！ チカは真っ赤に染まったぽっぺたを膨らませて湯船から飛び出した。

「かぜひいても、いいもん」

「明日お休みなのに、遊びに行けなくなるぞ」

「だって」急に娘が下を向く。濡れた前髪が表情を隠す。「おとうしゃん、あしたもおしごとでしょ、どうせ」

その通りなのだ。今度は啓介が下を向く。タイルの目地をするすると透き通った湯が滑っていく。見上げると、娘がまっすぐこちらをにらんでいた。愛嬌のある顔立ちではない、しかしその目は真剣に、こちらを見すえている。黒目がちの眼が潤んでいた。

「お父さんがお仕事しないと、チカにクリスマスプレゼントも買ってやれなくなるんだぞ」声をわずかに強くすると、すぐに「いいもん！」と返ってきた。

「いいもん、サンタさんにおねがいしゅるから、いいもん！」

サンタさんか、と啓介は大きく息をついて湯船に戻る。どこのどいつだ、サンタさんって。

ドアを開けた妻がバスタオルを大きく広げ、娘はその中に飛び込んでいった。

ひとりきりの浴室は、ひとりでもやっぱり狭くて啓介は膝を抱えるように中に収まる。

ようやく建てた我が城は、城というより、まるで砦のようだ、と天井を見上げる。しっくいにすでに、カビのような黒い染みが浮いている。砦を守るために、外に出て戦わねばならない。好きでやっているはずなのに、この見通しの悪さは何なのだろう。

守らなければならないものができて、とたんにあちこちが窮屈に感じられるようになった。それでもずっと戦わなければならない……何のために？

浴室の窓の外、生垣がざわめいた。風が出て来たのだろう。生垣はアカメを選んだが、妻が言うには5年しかもたないそうだ。しかしこのざわめき、もっと大きな木が鳴っているようだ。

膝を抱えて、肩まで熱い湯に浸かっていた。入っていたのはドラム缶だった。啓介はほおつ、と大きく息をついて、青空を見上げる。風呂を設えた場所はゆるやかな傾斜の上の方で、振り向けば大きな木の向こう、白い尾根が青空をくっきりと切り取っていて、大きな鳥がゆるやかに弧を描いたのがちょうど視界に届いた。

「どうだけいちゃん、湯加減」

脇で屈んで、薪をくべているのは友人の林くんだ。

「もっと沸かしてくれよ、ぬるくて出られん」嘘だった、すでにかなり温かい。しかし気持ちよさに勝てない。

「大変なんだぞ、早く替われ」言いながらも林くんはしごく機嫌がいい。

——おいけいちゃん、またあそこ行かねえか？

「あそこ」と言えばあの場所しかない。裏の山を少し登ったお花畑のすぐ上、最後の雑木林に入る手前にでっかい木があって近くには古い小屋、そこに置きっぱなしのドラム缶。

「沢の水ひいて風呂沸かして野宿しようぜ、中学の卒業記念によ」林くんが目をくりっとさせてそう言ったのだ。卒業記念といっても、夏も盛りを過ぎたばかりの頃だったが。

「けいちゃん、」急に真顔の林くんがこちらを見上げる。

「ほんとに、春にはここを出るんか？」

「ああ」啓介は手ぬぐいで顔をぬぐい、それを縁に掛けた。「木こりの三男じゃ、暮らしていけん、町の学校で俺、勉強したいことがあるんだ」

「すげえな、えらいな」温泉宿のひとり息子だから、わしは家を継ぐんだと言っている林くんは目をまん丸にしている。「何を勉強するんだ？」

「家を建てるとか、庭を作るとか……まだ決まってねえけどさ」

「すげえなあ」林くんは大きく息を吸い込んだついでに竹筒を思いきり吹いた。

熱い湯がごぼごぼと足元のすのこから湧き上がる。啓介はあつつ、と軽く飛び上がる。

林くんがびよこんと立ち上がった。「ほおらやっぱし熱いんじゃないか、替われ！」

ざわざわと梢を風が渡り、ふたりの笑い声が響く。「分かったわかった、もう出るから」

——もう出るから、って最後言ってたね、おじいちゃん。笑って。

葬儀場は通夜客が途絶えてからは、ろうそくの灯の下に三人が座るのみだった。

チカは、娘の髪をそっと撫で、また遺影を見る。

まだ黒々とした髪 of 啓介が、楽しげに笑っている。会社の慰安旅行で温泉に行った時の写真だった。

「よくよくお風呂好きだったよね」理栄がひっそりとため息交じりにつぶやく。

「最後もお風呂場で倒れるなんて……やっとお酒やめたのも驚いたけど、俺はこれから勉強するって言い出して。勉強って何を？ って聞いたけど笑ってただけで……何だったんだか」

スマートフォンから目を上げずに、遙が言った。

「でも、良かったんじゃない？ 眠ってる時もずっと穏やかな顔してたし」

「ちょっと遙」チカが娘の肩をかるく小突く。「なんでずっとスマホ見てんのよ、お通夜終わってからずっとスマホいじってて、なんなの」

「うん？ 見つからないんだけど」遙は祖母と母親に画面を向ける。

「何が見つからないって？」

「確かに写ってた、と思ったんだけどどっかに」

「何が」

「じいちゃん」遙はぼんやりと、窓の外を見る。そこにはただ、暗がりか広がっていた。

しかし確かに、風が梢を鳴らす音がして、三人は背を伸ばす。遙が静かに言った。

「大きな木の下でき……お風呂入ってピースサインしてた」

